

企業スポーツの現状から見るクラブチームのあり方 —バドミントン競技において—

The state of the club team who sees from the present condition of a company sport
—Set to a badminton game—

1K08B179-1 藤田理恵子

指導教員 主査 関一誠先生 副査 渡辺英次先生

はじめに

企業スポーツとはトップアスリートを排出する貴重な環境である。しかし、その企業たちが近年の不況により、経営が困難になるとチームにかかる費用を削減、または廃部させるという行動をとっている。バドミントンでも企業スポーツの廃部により休・廃部するチームが増えた。そのような中、バドミントン競技でクラブチーム化し、今もなおトップリーグに存在するトリッキーパンダースがある。10年前企業の廃部によりクラブチームという新たなシステムを模索し、懸命な経営努力をしている、このチームに興味を抱いた。

①企業スポーツの休・廃部の実態、我が国の企業スポーツとは②企業スポーツの役割③企業スポーツの経営、他競技での新しいモデル④トリッキーパンダースの経営方法について注目し、今後の企業スポーツのあり方について研究した。

第一章

アメリカのサブプライムローンが起こした100年に一度の金融危機は一瞬にして日本の経済を苦しめた。この影響を真っ先に受けたのが企業スポーツであった。

企業によるスポーツの奨励は、「職場における人間関係の構築の和」「従業員の健康管理」「福利厚生」といった、レクリエーションを目的とされていた。現在では様々な形で企業はスポーツと関わっている。「スポーツチームを所有すると言っても正規の社員で構成されるスポーツチームを持つ企業」「プロ化したチームを子会社として持つ企業」「契約あるいは委託社員として専門スポーツ従事者のチームを持つ企業」と多様に渡っている。

第二章

経済産業省が企業スポーツの撤退が及ぼす影響をまとめている。①競技力強化の観点から「各競技でのトップリーグへの参加チームの減少、各競技でのトップリーグの競技レベル低下」②選手の観点から「競技者が安心して練習できる環境の縮小、大学スポーツ、更にジュニアスポーツの衰退」③地域貢献の観点から「スポーツイベントや施設開放等の停止、地元市民がスポーツと触れ合う場の減少」と言われている。

また企業がチームを持つということは、企業の不祥事やマイナスイメージも選手が背負うということである。企業スポーツの撤退が及ぼす影響、特に競技スポーツへの影響は計り知れないのであ

る。だからこそ、企業に負担を強いらぬスポーツ体制が求められている。

第三章

新しいクラブチームモデルとして生まれた、1993年地域に根づくクラブを推進したサッカー競技であるJリーグであった。その理念は「強化」「地域」「国際化」であり、ドイツの地域スポーツクラブをモデルとした経営であった。また1996年、Jリーグでとりくみ出した、「Jリーグ百年構想～スポーツで、もっと、幸せな国へ。～」の活動も加わり、スポーツ界において、Jリーグに所属するチームの運営方法は日本のスポーツ界を引っ張る新たなモデルとして確立されている。

第四章

岐阜、大阪を中心に活動するトリッキーパンダースは、トップチームの活動と近年建てたバドミントンアリーナでの活動で経営を行っている。勝つことでの評価、レッスンや講習会での評価、地域住民からの評価などをもとに、あらゆるステークホルダーとの関係を築きながら経営されている。

第五章

企業チームとクラブチームの違いは、活動方法、理念、所属の形、それぞれ違いはあるが、実際支援する体制や金銭でのサポートはクラブチームであっても同等のサポートができるということが、今回の研究を通して明らかになった。また、クラブチームのマネジメントが円滑に行うことができれば、金銭面でも練習環境も良いものを提供できる、企業の不況や不祥事を背負うことなく活動できる、競技に特化した動きができる、入りたいという選手を企業という媒体ではなく監督の一言で獲得することができる、など企業と比べ勝っている部分も見えてきた。だがここで、マネジメントをできる人物が現在少ないということが懸念される。バドミントン競技が発展している今、こういったクラブの形で運営されるチームが増えていけば、テニスや卓球といった同じラケット競技でも、プロとして確立された種目にも負けぬ組織が成り立っていくだろう。サッカーや野球といった、国民が一体となりチームを応援する形がバドミントンでも生まれてくるのではないかと考える。

